

全私保連保育・子育て総合研究機構・研究成果報告書 「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する研究2」 を読む手がかり

保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

1 はじめに

本研究は、久保健太先生（関東学院大学専任講師）と先生の周りに集まる多様なメンバーたちによって繰り広げられています。月に一度、久保先生の研究室に集まるメンバーたち。メンバーにはさまざまな所謂社会的な肩書きを持つ人が集まっています。久保先生は研究者。保育現場からは園長、副園長、若手の保育士。保育の垣根を超えて、株式会社の代表取締役や編集者、音楽家など実に多様です。そして年齢も30代～50代まで、本報告書完了のあとからは20代も加わり、年齢層も多様です。それら錚々たるメンバーがひとところに集まり、真剣に言葉を交わし本を読み合い、研究を深めているのが本研究です。

メンバー構成がこのようになった理由の一端について、久保先生は報告書の冒頭に、次のように述べています。

「保育者が実践し、研究者が分析する。そのような研究に加えて、保育者と研究者が一緒になって記述するという研究ができないものかと思っています。

そこで、往復書簡を試みました。その意味で、往復書簡は実験でした。ある程度、深めたら、対面講読が必要になりました。…（中略）…対面講読においては、生成的な学びが生じることがわかりました。…（中略）…基軸とする理論を、保育者と研究者が共有することで、『一緒になって記述する』という研究が可能になるのではと考えたのです。

基軸とする理論として、私たちは、エリクソンの理論を学びはじめています。エリクソンの理論の外にも矢野智司、メルロ＝ポンティ、大田堯、木村敏、ジル・ドゥルーズの理論を学ぶことになるだろうと思います。また、柄谷行人、見田宗介（真木悠介）の理論も共有していくつもりです。」

私は、この研究会に研究機構の臨時委員として参加

させていただいています。研究会が始まると心地よい緊張感と深く濃密な時間が流れていきます。その空気を言葉で伝えることはなかなか難しいのですが、メンバー同士の信頼感に大きく支えられ、互いが互いを尊重し合っている心地よい緊張感と居心地のよさがそこにはあります。

参加を重ねる毎に、私はあることに気がつきました。研究の内容がこの研究チームのあり方そのものに連動している。研究チームのあり方がまた研究の内容の密度を高め、研究を予想もしないおもしろい展開へと導いていく。このあり方そのものが、もう1つの研究成果と言えるのではないかと思えたのです。そこで、この「読む手がかり」では、この「もう1つの研究成果」である久保研究チームのあり方について記していこうと思います。

研究成果報告書も、言葉をコンパクトに削ぎ落として理解しやすくまとめて整理するのではなく、この研究チームが織り成してきた時間そのものが流れと共に記されている内容になっています。研究チームでやりとりしていた生の資料や言葉をそのままに報告書として発表しています。そのため分量としては183ページにわたる長編の報告書になっていますが、哲学的な難解な議論も、寄り道も含めて、久保チームが積み重ねてきた時間を共に体験することで、物語を読むように読み進められると思います。

この「読む手がかり」が、久保研究チームの研究成果報告書という物語を、より深く味わうためのスパイスになってくれたらと願って書かせていただきます。そしてより多くの人に、この研究成果報告書を読んでもいただけるように願っています。

2 肩書きを超えて

「はじめに」でも記しましたが、本研究は久保先生を中心にしたチームで行っています。私は勝手に『久

保先生と愉快的仲間たち』と心の中で思いながら眺めています。この愉快的仲間たちが月に1回集って濃厚な議論を繰り広げるのです。そのメンバーは先ほどお伝えした通り、錚々たる社会的な肩書きを持つ人が集まっています。その全員が全力で1つのテーマに集中して真剣に議論し合う緊張感はただならぬものがあり、研究会が終わったあとは頭だけでなく全身が疲れ切っているが、夜まで興奮状態が続くような感覚になります。

でも時々ふと、大まじめに議論し合う大人たちの姿が、秘密基地で遊びに没頭している子どもたちのように見える瞬間があります。そこにはもう社会的な肩書きなど関係なく、年齢や性別なども関係なく、すべての肩書きを超えて、人として向き合っているからだと思えます。この肩書きを超えたチームの関係性がこの研究会にとって重要な要素であると感じます。

久保先生自身、この研究会に参加している時は、研究者というよりは父親として参加していると話しています。久保先生が現在、絶賛育児中のお父さんなので、その育児中のリアルなエピソードを写真や映像を交えて話してくれます。その時の久保先生は確かに研究者ではなく、完全にお父さんの顔になっています。

そんな雰囲気の中で、日常の暮らしの中でふと感じたことを語れたり、ほろっと溢れる思いが言葉になったりすることがあります。こうした日常のなんてことない一コマの中にこそ本質が現れてくるものです。肩書きを超えた人と人の付き合いであることが、予想もしない展開や日常的な視点をもたらして、この研究をおもしろくさせています。

それから、研究チームが開かれた雰囲気であることも重要です。これまた秘密基地の子どもたちが「おもしろそうな奴がいるから呼んでみよう」とか「何やっているの？ 仲間に入れて」という感じで、メンバーが増えたり減ったり、チーム内での役割もその時によって変わっていきたりします。研究の動きに応じて役回りが流動していきたり、人の成長や変化によって研究が動いたり、とにかくこの「先が見えない」「予想もしない展開が起こる」ことを楽しんでいます。

さらに、いろいろな「ズレ」も楽しむところがすごい。ズレを楽しむからこそ、同じ理論を巡っての理解の「ズレ」から議論が盛り上がりたり、新たな発展があったりするのは。この「ズレ」を楽しむのも、肩書きを超えて楽しもうとするからこそだと感じます。

でも、ただ肩書きを超えているだけではもちろんありません。一歩研究的な内容に踏み込んだ時には、それぞれのメンバーの持つ専門性が発揮されて凄まじい知識量と経験量と感性と諸々が研究に注ぎ込まれていくのです。その内容については研究成果報告書を読んでもいただきたいのですが、その専門性も肩書きを超えた信頼関係が基盤にあるからこそ発揮されているように思います。

書き出しで引用したように報告書の中には、さまざまな理論が出てきます。それだけ単体で理解を深めようとすると大変難解であると思われる（少なくとも私にとっては難解である）理論ですが、本研究の報告書ではこうしたチームのやりとりの物語の中で共に哲学の旅ができるので、身近に感じながら読んでいくことができると思います。こんなにおもしろい哲学書はなかなか存在しないのではないのでしょうか。

3 私たちの保育を私たちの手でつくる

この研究チームの居心地のよさは、温泉でリラックスできるとか、カフェでくつろげるとかいう類の居心地のよさではなく、没頭できる心地よさと真剣に遊び切ったあとの爽快感や心地よい疲労感と似ています。保育の専門性の垣根を超えた人たちとこんなにも真剣に、保育について議論できることが楽しくて仕方がない。そう最近まで思っていました。

しかし、久保先生の「保育は保育者だけのものではない」という言葉にハッとしました。

報告書の中に出てくるエピソードの1つですが、ウッディキッズ（東京都認証保育所・東京都あきるの市）の子どもたちと地域のおじいちゃんが映っている、それはそれは微笑ましい写真があります。どろんこの子どもたちを乗せた散歩車を微笑ましく眺めているおじいちゃんが映っている写真です。周りには豊かな自然があって、風の香りが写真から伝わってくるかのようです。このおじいちゃんだって、保育に携わる保育者なのだということです。

「私たちの保育を私たちの手でつくる」、その「私たち」は保育者だけにとらえずに「私たち」の認識を広げていくこと。その認識を広げるヒントが久保研究チームのあり方にあると思うのです。その認識を広げたところに、「私たちの保育」を「私たちの手でつくる」が、「私たちの社会を」を「私たちの手でつくっていく」

ことにつながるような手応えを感じるのです。

4 「私たち」を広げる実践を「私」から

私自身、保育士養成の短期大学を卒業して保育士になってからすぐに保育の現場に出て、それから今に至るまで、かれこれ20年以上保育の仕事に携わって生きてきています。保育の現場は毎日たくさんの保護者が行き来し、地域の方々にもひらかれた、出会いの場所である一方で、どこか閉ざされた世界であるとも感じていました。

自分が勤務する保育園を一步出ると、すぐ近くにある別の保育園の保育者の顔も知らなかったり、見たことがあっても顔と名前が一致しなかったり、研修で出会ってもその後もずっと続いていくような関係を築いていけることも少ない、そういう保育者は多いのではないのでしょうか。その場合、「私たちの保育を私たちでつくっていく」と考える時、「自分の保育園の保育(私たちの保育)を自分たちの保育園の職員(私たち)の手でつくっていく」と解釈してしまうのではないのでしょうか。

しかし、その「私たち」の認識を、どろんこの子どもに話しかけてくれるおじいちゃんにまで広げてみるとどうでしょう。「この街で暮らす私たちの手で、この街の保育をつくっていく」「この村で暮らす私たちの手でこの村の保育をつくっていく」「この土地で暮らす私たちの手でこの土地の保育をつくっていく」と、一気に世界がひらけたような気がします。

このことを久保研究チームのあり方から学び、私個人が「私たち」を広げることを意識的に取り組むようになりました。例えば、小学生のわが子の通学路にある小規模園に「近所のおばちゃん枠」で関わることから始めて、最近では保育士資格を活かして、月に1回か2回は保育に実際に入らせてもらったりしています。そうこうしていると、気づけば「近所のおばちゃん枠」が増えていき、その中にはバイオリンの奏者がいたり、ヨガのインストラクターがいたり。緊急事態宣言が開けたら夕方、お庭でバイオリンを聴きながら夏の夕べを過ごす会をしよう、などと盛り上がっています。

この「近所のおばちゃん枠」も保育者だと思えば、保育が地域の中に柔らかく広がっていく手応えを感じます。保育所保育の従事者だけが保育者ではない、わ

かっていたようでわかっていなかったことでした。

私は仕事としていくつかの保育園の運営に関わっています。さまざまな仕事をしている関係で1つの保育園に関わる時間には限りがありますが、保育園のICTのシステムやSlackなどのビジネスチャットツールを利用することで、日々の保育の様子は十分に把握することができています。それに加えて、身体(スケジュール)が空いた時に保育に入ったり、会議や園内研修に参加して、子どもや保育者の空気を肌感覚で感じingことを補う、ということが続けています。改めて考えると、そういった外部の関わりをする人も保育者であり、確かに日々保育園に関わっている職員以外の存在があることの意味があるように手応えを覚えています。

「私たち」を広げることで保育の可能性が広がる、「私たち」を広げることで地域や社会とつながり、社会で子どもを育てていくような柔らかなイメージが目前に広がってきます。

5 若き保育者の育ち

久保研究チームの中には保育現場から参加しているメンバーとして、日々現場で保育を担っている中堅の保育者が参加しています。園長職などは園外との関わりも多く、そういった機会に慣れていると思いますが、保育者はそうではありません。きっと彼もそうであったと思います。

園から一人で大海原に出て、さまざまな肩書きの人と出会い、そこでいつの間に肩書きを超えてチームの一員として保育について議論をする中で、彼は大きく変化したようでした。久保研究チームが試みている研究のあり方が、現場の保育者の育ちにつながるが見えてきたことは大きな成果の1つであると考えています。

今後は、彼よりも若い現場の保育者が2名増えて、チームが起動するとの報告を受けています。この2名の若い保育者もどのように変化していくのか、またその変化がチームや研究にどのような影響を与えていくのか、興味を抱いて見ているところです。

このようにして、保育者自身が学びたいと思った時に、その思いを受け取り、時間をつくって送り出している現場があってこそその研究チームです。送り出している現場と研究チームの「私たち」で、若い保育者たちの冒険の機会をつくることの価値を改めて感

じています。研究チームと現場が別々ではなく、「私たち」となっていくことに希望を感じます。

6 全私保連研究機構の役割

本研究機構では月に1回、研究企画委員会を開催しています。そこで、現在行われている委託研究の報告が行われます。「ちょっとおもしろい展開になりました」「予期せず、こんな流れになっています」というのが毎回の久保研究チームの報告です。

真摯に目の前の子どもに向き合っていく、その先に「何が出てくるかわからない」「何が起こるかわからない」。何かしらの成果を目指してそこに向かっていくのではなく、ただただ目の前の子どもに向き合うことを徹底していることが久保チームの研究の価値だと思います。

話しの流れで、「その話しだったらこの本に触れたいよね」「ちょっとこっちに近い気がする」と久保先生の本棚から次々と新たな本が登場して、新たな理論が加わっていく。その議論の理解もメンバー内で「ズレ」が生じることが多々あり、その予測できない「ズレ」こそをむしろ楽しみながら研究を進めている。こうしたことが、研究会のみならず、本委員会においてもしばしば起こるのです。

まとまった時間や予算が確保されながら、ここまで自由に研究ができる環境づくりは、実現したくてもなかなか容易にできることではありません。チーム内の久保先生の見事なファシリテーションもありながら、その久保先生を支えているのは全私保連研究機構にほかなりません。この研究機構の存在意義も、改めて共有する必要があると感じています。久保研究チームのように、自立して自由に予測できない化学変化を楽しむからこそその研究に広がりや深みが増していく。それを可能にしている研究機構の意義は大きいと改めて思っています。

全私保連研究機構が発足したのは2005年5月。1997～1998年、全私保連会長に就任された小川居氏の「研究所」構想を受けて検討がなされ、発足に至ったと聞いています。

発足した際、「研究所」ではなく「研究機構」にした理由は、「特定の研究員を置くのではなく、研究企画委員会を中心に研究テーマを設定し、外部の研究者や会員に呼びかけて柔軟に、テーマに沿った研究を組織

していこうという意図からでした。」と、発足当時の研究機構委員長である遠山洋一氏が記しています。この研究機構発足当時の理念が紡がれて、今現在の私たちのこの研究を支えてくれています。

7 おわりに

ここまで、久保研究チームの内輪話に終始してしまいましたが、最後に研究タイトルと研究内容の関係について私見を述べ、この「読む手がかり」を閉じたいと思います。

研究機構が委託したテーマは、「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する研究2」でした。ローカル・ガバナンスとは、久保氏によれば「自分たちの手で自分たちの社会をつくる民主主義のこと」です。

久保氏は本研究で、保育の本質を民主主義の担い手を育てることとし、その保育の場を「居心地のよい場所」と仮定し、居心地の本質を「基本的信頼」「自己決定」「主導権」「勤勉性」の4つの感覚から解き明かそうと試みています。保育が地域福祉の一要素というだけではなく、地域福祉の本質を保育の本質によって解き明かそうとしているのだと、私には思えました。

今後の研究に期待をしながら、私自身も社会をつくる一人として、自分の手で何ができるのか、研究と共に考え動いていきたいと思っています。

城 真衣子 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会臨時委員

委託研究・研究成果報告書の本報告書は、HP おおむし通信に掲載します。

